# 交流欲 Ⅱ

目次

交流欲　Ⅱ　（人間と「動植物界」との交流）

四、　人間と動物との交流
五、　人間と植物との交流
六、　人間と古生物との交流

# 交流欲　Ⅱ

（人間と「動植物界」との交流）

## 四、人間と動物との交流

それでは、次に「人間と動物」との交流について、少し考えてみたいと思う。例えば、子供の頃には多くの人たちが、近くの川や池などで魚（フナ、ハヤ、ナマズ、ドジョウ、その他）やアメリカザリガニ、あるいはカエルやオタマジャクシなどをアミで捕まえたり、また、近くの雑木林や裏山などでカブトムシやクワガタムシ、あるいはセミやトンボ、その他などを捕まえたりした経験や想い出を持っているかと思う。また、愛玩動物（ペット）としては、イヌやネコなどを初めとして、ウサギや小鳥、あるいはカメや金魚、さらに熱帯魚、ハムスター、トカゲ、その他などを飼っている人たちも非常に多いかと思う。

それでは、われわれ人間は、なぜ「動物」と「関わる」（交流する）のが基本的に「好き」なのだろうか？　それは、言うまでもなく、われわれ人間もまた同じ「動物」だからである。そして、本来ならば、「人間は人間」と「関わる」（交流する）のが最も自然なことであり、それは、「イヌはイヌ」と「関わる」（交流し）、また、「ネコはネコ」と「関わる」（交流する）というのが、最も自然なことになるかと思う。それでは、われわれ人間は、なぜに他の動物たちとも深く「関わろう」（交流しよう）とするのだろうか？　それには、次のような実に多種多様な「理由」があるからである。

まず、考えられることは、やはり「食料」としての「動物」であり、それは、狩猟による「鳥獣」などを初めとして、漁業による実に様々な「魚介類」、それに加えて、畜産での「ウシ、ブタ、ヒツジ、ニワトリ、その他」などの実に数多くの家畜を飼っているわけである。また、労働力や乗り物としての「動物」には、例えば、「ウシ、ウマ、ゾウ、ラクダ、ロバ、その他」などがいるかと思う。一方、人間にとって何らかの害になるということで駆除したり、また、撃退するために関わる動物としては、例えば、ヘビ、クマ、カラス、ハチ、モグラ、ネズミ、ゴキブリ、ハエ、カ、害虫、その他などがいるかと思う。また、主に「愛玩動物」として飼われる動物としては、イヌ、ネコを初めとして、小鳥や爬虫類、或いは、魚類や昆虫類、その他などがいるかと思う。それらに加えて、動物の生態研究や野生動物保護活動などのために深く関わる場合もあれば、さらに何らかの競技用（例えば、競馬、闘犬、闘牛、闘鶏、その他）などとして関わる場合もあり、また、動物園や水族館あるいはサファリパークなどには世界中の実に様々な「珍しい動物や魚たち」がいて、それらの様々な「動物や魚たち」と深く関わるような場合もあれば、また、最近では、バードウォッチングなども人気があり、その他、実にいろいろとあるかと思う。

例えば、われわれ人間は、なぜ「イヌやネコ」などを飼うようになったのだろうか？もちろん、それにもいろいろな理由があったかと思うが、イヌの場合、最初は恐らく、食料とともに、番犬や猟犬或いは牧羊犬として飼われ、そして、ネコの場合は、ネズミ捕りやその他で飼い始めたのではないだろうか。それは、「ウシ、ウマ、ブタ、ヒツジ、ニワトリ、その他」などもみな同じであり、基本的には「食料や労働力」として飼われていたのだろう。そのように本来は、まさに「実用的なところ」から飼い始めたのではないかと思う。もちろん、それと同時に、「愛玩動物」としても飼われるようになるわけだが、それでは、われわれ人間と「愛玩動物」との関係について、もう少し考えてみたいと思う。

＊　＊

まず、イヌやネコの「共通の祖先」としては、約六五〇〇万年前～約四八〇〇万年前に

生息していた「ミアキス」という今日のイタチやテンのような生き物であり、当時は、気候も温暖で森林も豊かだったので、パラミス（擬ネズミ）やプティロドゥス（リス似）などを捕食しながら、樹上で生活をしていたという。その後、「ミアキス」は、いわゆる「クマ科」と「ネコ科」それに「イヌ科」（「キノディクティス」）へと進化し、その「キノディクティス」から、一部は、「キノデスムス」という動物に進化し、リカオン属の祖先になるとともに、一方、約一五〇〇万年前、「キノディクティス」から進化した今日のイヌによく似た姿の「トマークタス」という動物は、北米では気候の寒冷化で森林豊かな土地にも「草原地帯」が広がるようになると、その草原へと出て、そこで「狩り」をするという、まさに今日の「イヌの祖先」となって行ったということである。その後、歳月は流れ、今から約一〇〇万年前になると、前述の「トマークタス」から様々な「イヌ科の動物」（例えば、キツネ属、タヌキ属、ドール属、イヌ属、その他、全十一属）へと進化し、その後は、「イヌ属」も「七種のイヌ」に分かれて、そのなかの「タイリクオオカミ種」から、今日の「イエイヌ」へとなったということである。

一方、ネコの祖先というのは、いわゆる草原へと出た「イヌ科」とは違って、むしろ森に残った「ネコ科」として「独自の進化」を遂げて行くことになる。そして、その系譜は、一般に、「ミアキス」から「プロアイルルス」へと進化し、その「プロアイルルス」から「プセウダエルルス」へと、そして、その「プセウダエルルス」から、二つに枝分かれし、一方は、「マカイロドゥス」（絶滅）、一方は、「シザイルルス」で、その「シザイルルス」から「ネコ科」（ネコ亜科）（①小型ネコと②大型ネコ）、その①の「ヤマネコ種」の中の「リビアヤマネコ」から「イエネコ」へという流れになるかと思う。つまり、「ミアキス」→「プロアイルルス」→「プセウダエルルス」→「シザイルルス」→「ネコ科」（ネコ亜科）（①小型ネコと②大型ネコ）→①の「ヤマネコ種」の中の→「リビアヤマネコ」が人に飼われて、やがて、今日の「イエネコ」へと推移したという考え方である。

まず、「プロアイルルス」というのは、約二五〇〇万年前に樹上で生活していた肉食獣であり、一般的には「プセウダエルルス」の祖先とされているものである。次に、その「プセウダエルルス」というのは、約二〇〇〇万年前から約八〇〇万年前に生息していた動物であり、これを最も古い「ネコ科の祖先」として、今日では「ネコ科」（ネコ亜科）の中の「小型ネコ」（例えば、オオヤマネコ、ピューマ、ボブキャット、その他）と「大型ネコ」（例えば、ライオン、トラ、ジャガー、ヒョウ、チーター、その他）や「プティロドゥス亜科」（シャーベルジャガーなど）の祖先とされているものである。その後、専門的には細かな進化があったかと思うが、最終的には、「ネコ科」（ネコ亜科）のその①の「ヤマネコ種」のなかの「リビアヤマネコ」が、専門家の「ＤＮＡ鑑定」などによっても、現在の「イエネコ」の「直接の祖先」であるということが判明したということである。

ちなみに、「クマ科」というのは、①ジャイアントパンダ亜科、②メガネグマ亜科、そして、③クマ亜科に分かれ、その「クマ亜科」は、さらに、①マレーグマ属、②ナマケグマ属、そして、③クマ属（例えば、アメリカグマ、ヒグマ、ホッキョクグマ、ツキノワグマ、その他）へと細分化していくことになるかと思う。

一方、鰭脚類（ひれあしるい）というのは、クマに近い共通の祖先を持つという単系統類（つまり「アンフィキオン科」）から派生し、それは、①アザラシ科、②セイウチ科、そして、③アシカ科（例えば、アシカ、トド、オットセイ、オタリア、その他）などへと

細分化していくことになるのである。

＊　　＊

ところで、子供の頃のペットとしては、多くの子供たちがそうであるように、例えば、近くの川や池或いは田んぼやその他にいる、例えば、フナやハヤ或いはザリガニ、また、カエルやオタマジャクシ、また、近くの雑木林や裏山その他などで、カブトムシやクワガタムシ、また、トンボやセミ、あるいはチョウなどを捕まえたり、また、草むらや庭その他などにいる、例えば、トカゲ、コオロギ、バッタ、テントウムシ、ダンゴムシ、アリ、その他、そのような自ら捕獲した「小動物」をその時々のペット代わりにするようなこともあれば、もちろん、イヌやネコを初めとして、昔は、よく「縁日や祭り」などの時には、ひよこやミドリガメなども売られていて、それを買って帰り、ひよこは、大きめの箱などに入れて百ワットの裸電球それに透明なガラスなどでふたをして暖め、大きくなるまで育てたり、また、金魚すくいで楽しく掬った金魚を家の水槽などに入れて楽しんだりしたものである。もちろん、犬も飼っていて、小学校の頃、学校を終えて友だちと話をしながら道を帰ってくると、その話し声や足音或いは姿などを見聞きすると、当時はまだ昼間は放し飼いだったので、遠くの方から一目散に駆けて出迎えてくれたりしたものである。また、散歩などに連れて行くと、もうぐいぐいと力強くひっぱられたり、また、一回りして散歩から帰ると、犬もハーハーと非常に荒い息をしているので、洗面器などに一杯水を入れて飲ませると、もうベロベロと音を立てて水を飲んでいたものでした。

また、子供の頃は、ネコも飼っていました。そのネコは、非常に「ネズミ捕り」が得意で、ネズミを捕ると、その「ネズミ」をよく座敷にまで持って来ては、「ネズミを捕ったからほめてくれ！」という感じで、ニャーニャーと大きな声で鳴き騒ぐので、座敷の上まで持って来たのを叱りながらも、「よく獲った！」という感じでほめてやると、その親ネコは、ネズミを口にくわえて縁の下にまで持って行き、それを生まれてそれなりに大きくなった子ネコに渡していました。そして、それを見ていて非常に驚いたことは、その捕らえたネズミが、まだ生きていたということである。それは、親ネコがわざわざとどめを刺さずにネズミを捕らえたということである。その弱ってはいるが、まだ生きているネズミを子ネコに渡し、その子ネコは、そのネズミに爪を立てながら遊んでいるわけである。そして、その子ネコから逃げ出そうとすると、親ネコが捕まえて、また、子ネコのところまで口にくわえて持ってきて渡すのです、つまり、親ネコは、子ネコにネズミの「存在」や「捕り方」などを教えているのです。そして、さんざん生きたネズミをもて遊んだ挙げ句に、そのネズミを親子で食べていましたが、それは、子ネコに「ネズミの味」を覚えさせるためでもあるのだろう。また、その親ネコは、ヘビやトカゲ、或いはスズメなども、よく捕ってきたネコであり、年老いるまで生きていましたが、何時しかいなくなってしまいました。恐らく、死ぬ時には飼い主にその姿を見せずに、どこかに行って死ぬという話があるが、そういう感じのする賢いネコでした。

というのも、そのネコは、雷のするもの凄い雨の日に、夕方ごろ、びしょ濡れの状態で、台所のところに迷い込んできた極端に痩せた「のらネコ」だったのです。そして、最初のうちは、エサをやると家に居つくからということで、エサをやらないでいたのです。しかし、あまりニャーニャーと弱々しく頻繁に鳴くので、仕方がないということで、夜十時頃に残りご飯を与えてから、家に居つくようになったというネコなのです。そして、そのネ

コがスズメを捕る様子を見たことがあるが、それが実に巧みでうまいのです。それは、最初、草陰にじっと身を隠していて、相手の様子を見ながら、身を低くして忍び足で少し近づいては止まり、また、近づいて行き、そして、至近距離から一気にそのスズメが飛び立つ瞬間に襲いかかって捕らえていました。また、ネズミがよく出る場所があって、そこに何時間もずっと座ったままネズミが出て来るのを忍耐強く持っているのも、よく見かけたりしたものでした。今から思うと、恐らく、そういうふうにして生きて来た「野生のネコ」だったのかも知れない。また、そのネコに子ネコが三匹生まれたことがありましたが、家にネコは、一匹いればよいということで、その子ネコ三匹とも近所の人にそれぞれくれてしまったことがあったのです。一匹は、真っ白なネコで、一匹は、黒っぽいネコ、そして、もう一匹は、茶色の猫でしたが、そうしたら、その親ネコは、子ネコが三匹ともいないということで、ほとんど半狂乱のような状態になり、やがて何か鼻水やよだれなどをたらしたり、また、腰が抜けたようになって、ふらふらと歩いてはバタと倒れるような感じになってしまったのです。それを見ていて、あまりにも可哀想だというので、茶色の猫だけは親ネコに返してやったら、やがて正常の状態へ戻りましたが、それが前述の「子ネコ」（親からネズミをもらっていた子ネコ）ということになるわけである。

また、冬になると、当時は、座敷の中央にフトンを被せた「掘りごたつ」（「練炭コンロ」で暖める）というのがあり、ネコも寒いので、よくその「堀りごたつ」の中に知らぬ間に潜り込んで下で寝ている時があり、テレビなどを観ていると、ふと足に何かぶつかるものがあり、「……あっ、また、ネコが潜り込んでいる」というような感じで、中にいるネコをひっぱり出すと、そのネコは、まさに「一酸化炭素中毒」にかかったようにぐったりしている状態で、「……もう、しょうがないなあ」という感じで、玄関先のコンクリートの上にしばらく横に寝かせておくと、やがて、自ら起き出して歩き始めるというのがありました。また、冬の寒い夜など、フトンの中で寝ていると、耳許でゴロンゴロンとのどを鳴らしながら、まさに「フトンの中に入れて」という感じで、ニャーニャーと甘えて鳴いている時があり、だめだと手で追い払うと、また、のどをゴロンゴロンと鳴らしながら、耳許でニャーニャーと弱く執拗に鳴くので、仕方なく「フトンの中」に入れてやると、今度は、ネコは、人の横腹を枕にして、まるで「ネコいびき」のようにゴロンゴロンとのどを鳴らしながら寝ていたものでした。さらに、一度、またたびをネコに与えたことがありましたが、その時の、ネコの「乱れ様」は半端ではなく、身体をひっくり返して、何度もその身体を悩ましげに「床（や畳）」などに擦りつけながら身体をくねらせ、顔は恍惚の表情をして、よだれまで垂らして身をくねらしているのを見た時には、これほどまでに豹変するものかと、子供心にも非常に驚いたりしたものでした。

＊　　＊

それでは、もう一度、「愛玩動物」について、あらためて考えなおしてみたいと思うが、例えば、近くの「ペットショップ」などに行けば、実にいろいろな「愛玩動物」が出そろっているわけだが、それでは、われわれ人間は、なぜ「愛玩動物」を飼いたいと思うのだろうか。確かに、この問題をあらためて考えてみると意外と難しい問題ではあるが、しかし、基本的にはわれわれ人間の「心」というのは、いつも「何か交流できるもの」を求めている。それゆえ、本来であれば、「人間と人間とが交流する」のが、最も「深く交流できる対象」ではあるが、それに続くものとして、いわゆる「人間と動物との交流」がある

ということである。それはもちろん、われわれ人間も本来は「動物」であり、それゆえ、ほかの「動物」ともいろいろ共通するところが数多くあるからである。そして、基本的にはわれわれ人間に近い「動物」であればあるほど、それだけわれわれ人間とは「より深く交流できる対象」ということになるかと思う。――例えば、われわれ人間に最も近い動物としては、チンパンジーを初めとして、ゴジラやオランウータン、それにサルなどの「霊長類」がいるかと思うが、それに続く「動物」としては、やはり「イヌ、ネコ、ウマ、ウシ、ヤギ、その他」ということになるのかも知れない。

つまり、本来であれば、いわゆる「魚類、両生類、爬虫類、鳥類、そして、哺乳類（霊長類）」の順で、より深く「交流できる対象」（つまり「心を通わすことができる対象」）となるものであるが、それでは、なぜ子供たちは、川魚やアメリカザリガニ、あるいはカブトムシやクワガタムシ、その他などを好むのだろうか。もちろん、それにもいろいろな理由があるかと思うが、ただ、子供たちの「愛玩動物」となりやすいものは、一般に、やはり手軽に手に入るもの、また、飼いやすいもの、それに交流しやすいものになるかと思う。それゆえ、クモやカマキリ、あるいはヘビやコウモリ、その他などは、一般的には敬遠されやすいものであり、一方、大人の場合は、ペットとして禁止されている動物以外は、何でも可能であるが、ただ「トラやライオン或いはワニその他」などの大きな動物というのは、飼育も食費もまた手に入れるのも大変であり、しかも、危険性も高いということで、一般的には「愛玩動物」とはなりにくいということになるのかも知れない。

それゆえ、われわれ人間に馴染みやすく、また、飼育も食費も、また、手に入れるのも簡単で、しかも、危険性のあまり伴わない動物が、一般的には「愛玩動物」になりやすいということである。しかも、われわれ人間の「心」というのは、「交流できにくいもの」よりは、やはり「交流しやすいもの」を求めているとともに、どこまでも「深く交流できるようなもの」と深く心を通わしているような時こそ、われわれ人間の「心」というのは、最も深く満たされている「心的状態」になっているということである。そういう意味からも、やはり「イヌやネコ」などは、われわれ人間にとっては、最も適した「愛玩動物」（つまりは「ペット」）ということになるのかも知れない。それは、やはりお互いの「心」と「心」とを深く交流させることができ得る動物だからである。

それでは、カメやトカゲ、また、魚類や昆虫類などは、あまり「心」を深く交流させることなどできないじゃないかという反論があるかも知れない。確かに、こちら側からいくら一生懸命に「心」を尽くしても、相手からの「反応」は、いまひとつもの足りないものがあるかも知れない。しかし、相手の「動物」をあれこれ世話したり、観察しているだけでも楽しいものであるとともに、やはり「生き物」と一緒にいるというだけで、われわれ人間の「心」は、自然と「なごむ」ことにもなるということである。

ましてや、その動物がその人にとって「大好きな（或いは特に気に入っている）動物」であればあるほど、なおさら、その「動物と深く関わっている（或いは交流している）」時には、やはりその人の「心」というのは、非常に満たされた「心の状態」になっているということである。――それは、「バードウォッチング」などでも同じことであり、人によっては野鳥などを双眼鏡で観察して、何が面白いのかと思う人もあるかも知れない。しかし、自然のなかに自らも深く溶け込んでは、野鳥の「姿や鳴き声」などをあれこれ観察しているうちには、ふだんあまりにも「人工的な環境」のなかで時間に追われ、あわただ

しく生活している「心の状態」から次第に解放されて、自分の「心の中」にも、やがては「自然の息吹き」が満ちて来るとともに、再び、人間本来の「自然のリズム」というものを取り戻すことにもなるということである。

つまり、「動物」と深く「関わる」（交流する）というのは、ただ単に「楽しい」というだけに留まるものではなく、実はふだん「人間社会」のなかで実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされている「心の状態」から、知らず識らずのうちに、人間らしい本来の「自然の心」を取り戻すことにもなるからである。なぜなら、「動物」そのものが、まさに「自然の心」や「自然のリズム」などを持った存在だからである。それに比べて、われわれ人間の「心」というのは、自分でも気づかないうちに、実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされたいわば「ゆがんだ（不自然な）心」になっているということである。だからこそ、われわれ人間の「心」というのは、まさに「自然の心」や「自然のリズム」などを持った「動物」とめぐり逢うと、なぜか「救われたような思い」に襲われるとともに、不思議と「心の安らぎや落ち着き」などを取り戻すことにもなるわけである。それは、なぜかと言えば、それは、そもそも「動物」そのものが、本来、まさに「自然の心」や「自然のリズム」などを持った「存在」（つまり「生き物」）であり、そして、そのような「自然の心」や「自然のリズム」などを持った「存在」（つまり「生き物」）と直接的に触れ合うことによって、われわれ人間というのは、ふだんはすっかり忘れている、実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされている、いわば「ゆがんだ（不自然な）心」の状態から、まさに人間らしい本来の「自然の心」というものを、再び、取り戻すことにもなるからである。

## 五、人間と植物との交流

それでは、今度は「人間と植物」との交流について、少し考えてみたいと思うが、その「植物界」というのは、一昔前とはかなり違ってきていて、今日の「植物界」というのは、一つは、「コケ植物」（それは、①緑藻門、②蘚苔門、③苔門、そして、④車軸藻門）から成り、そして、もう一つは、「維管束植物亜界」であり、それは、「①古マツバラン門、②ヒゲノカズラ門、③トクサ門、④ハナヤスリ門、⑤シダ門、⑥マツ門、⑦ソテツ門、⑧イチョウ門、⑨マオウ門、そして、⑩被子植物」から成り、そして、①～⑤までが「シダ植物」であり、また、⑥～⑨までが「裸子植物」ということになるかと思う。

さて、われわれ人間にとっての「植物」ということになれば、一つには、自然のなかに生息している実に多種多様な「野生の植物」などが、まず存在し、次に、われわれ人間の食料としての実に「様々な農作物」などがあり、それに加えて、われわれ人間にとっては極めて親しい関係にある「園芸植物」などがあるかと思う。

＊　＊

それでは、まず最初に、自然のなかに生息している実に多種多様な「野生の植物」について考えてみたいと思うが、われわれ人間にとって「野生の植物」というのは、ただ単に「自然の風景」として、「きれいだなあとか、美しいなあとか」いったようなことだけに留まるものではなく、実はもう誰でもよくご存知のように、極めて大規模な「光合成」を行なっているものである。それは、葉緑体を持つ草木の葉のなかで光のエネルギーを受け

て、水と二酸化炭素から「明反応」で「酸素」を放出し、そして、「暗反応」で「炭水化物」（でんぷんやブドウ糖など）をつくり出している。そして、自然のなかに生息している実に多種多様な「野生の植物」などが行なっている、その極めて大規模な「光合成」こそは、まさにこの地球上に生息するほとんどあらゆる「生命体」にとっては、どうしても欠くべからず最も大事な作用であり、その極めて大規模な「光合成」作用なくしては、この地球上の大気圏に「酸素を多く含む大気」というものは存在しないとともに、酸素を取り入れて呼吸を行なっているこの地球上のありとあらゆる「生命体」は、生命を維持することすら全くできなくなり、すべては死に絶えてしまうものである。それゆえ、「野生の植物」たちが行なっている極めて大規模な「光合成」こそは、この地球上で行なわれている最も大事な「作用」の一つになるということである。――もちろん、「野生の植物」の働きは、それだけに留まるものではなく、例えば、山に降った大量の雨をその森林の根が吸い上げて蓄えてくれるために、大洪水を防ぐことにもなるわけである。また、森林の木は、「紙・パルプあるいは木材」などとしても実に様々に利用されているものであり、それらに加えて、様々な草木などは、あらゆる動物たちにとっての「食料」となっていることなどは、もう今さら敢えて言うまでもないことである。

＊　　＊

では、次に、われわれ人間の「食料としての実に様々な農産物」について、少し考えてみたいと思う。例えば、大昔の原始人たちは、自然のなかに生息している動植物をそのまま「狩猟や採集」などの手段によって得ていたわけである。やがて、新石器時代にはいると、人間自らが動植物を育てるという「農耕や牧畜」などが始まるとともに、一定の場所に住みつくようにもなるわけである。そして、「農耕」（約一万年前）こそは、まさに『食糧生産革命』と呼ばれている人類史上最も「画期的な出来事」の一つになるわけである。なぜなら、安定した「食料」が得られるようになることは、すなわち、「生活」の安定を意味するとともに、一定の場所に多くの人たちが一緒に住むようになることで、いわゆる「村落」（つまり「村落社会」）が初めて誕生することにもなるからである。

そして、そのようにして始まった「農耕」では、例えば、イネ、ムギ、マメ、イモ、野菜、くだもの、その他などが、やがて栽培されるようになるが、それでは、「農作物」の問題で最も大事なことは何かと問えば、それは、やはり「品種改良」ということになるかと思う。というのも、今日われわれが食べている「イネ、ムギ、マメ、イモ、野菜、くだもの、その他」などは、すべてわれわれ人間が何度も「品質改良」してきた極めて人工的な「植物」であり、それゆえ、決して「野生のままの植物」などではないということである。それでは、なぜ「品質改良」を行なうのだろうか？　それはもちろん、「よりよいもの（品種）にする」ためであるが、それは、具体的には「色や形また味や質などをよくし、それに病気にも強く、収穫高も高いもの、その他」、そのようなものにするためである。そして、そのような「品質改良」を行なって、「よりよいものにしよう」というところにこそ、われわれ人間の最大の「特徴と特性」とがはっきりと表れているということである。

つまり、われわれ人間は、なぜ「よりよいものを志向する」のかと言えば、その最大の理由としては、それだけわれわれ人間の「心」にとって「より深く交流できるものになる」からである。つまり、「色も形も味もよりよい」ほうが、われわれ人間の「心」とはより深く交流できるとともに、できれば、どこまでも深く交流できるような「最上のもの」に

めぐり合いたいということにもなるわけだ。そして、誰でも自分の「大好きなもの」（或いは「特に気に入っているもの」）などを食しているような時こそは、われわれ人間の「心」というのは、最も満たされた「心の状態」になっているはずであり、それは、自分の「心」とその「食べ物」とがどこまでも深く「交流」（つまり「深く溶け合えて」）いるからである。

＊　　＊

最後に、われわれ人間にとっては極めて親しい「園芸植物」について、考えてみたいと思うが、その「園芸」には、「果樹園芸、野菜園芸、それに花卉園芸」とがあり、ここでは、それらの「園芸」のなかでも、特に「花」について考えてみたいと思う。

例えば、春には、いわゆる「春の七草」を初めとして、一月から二月には、可憐なスイセンや黄色いフクジュソウ、また、二月から四月には、梅や桜などの花が咲き誇るとともに、野や畑などには黄色い菜の花がいっぱいに咲いて、チョウやミツバチなどが蜜を集め始めることにもなるわけである。また、四月から六月には、ツツジやサツキ、また、五月には、花の女王とも呼ばれる美しい薔薇の花や、大きくて色彩鮮やかなボタンの花、一方、尾瀬では美しいミズバショウの姿が見られ、六月には、赤や白あるいは青紫色のハナショウブや、梅雨に入ると、色彩鮮やかなアジサイなどが咲き匂うことにもなるわけである。また、夏には、色彩鮮やかなアサガオや黄色いヒマワリの大きな花が咲き、そして、秋には、「秋の七草」を初めとして、野に咲く可憐なコスモスや、また、野辺には真っ赤なマンジュシャゲ、そして、大小多彩で華やかな菊の花などが咲き薫り、やがて秋が深まれば、山では、まさに「紅葉狩り」のシーズンの到来とともに、野辺には白いススキの穂が一面に咲くようにもなるかと思う。そして、晩秋から冬になれば、今度は白いサザンカの花や色彩鮮やかなシュクラメンの花などが見られるようになるということである。

そのように、日本の「四季」（春夏秋冬）には、実に多種多彩な「草木の花」が咲き薫ることになるかと思う。それでは、われわれ人間は、なぜ「草木の花」を好んで愛でるようなことをするのだろうか。この問題も考えてみると、なかなか分かりにくい問題ではあるが、しかし、植物自身には非常にはっきりと分かっているのである。というのも、植物たちが花を咲かせるのは、一般に「昆虫やその他の生き物」などをできるだけ惹きつけては、花びらの中にあるおしべの花粉を運ばせ、そのおしべの花粉をできるだけ多くの「めしべに受粉」させるためであり、その結果として、受精したそのめしべから、やがて、「実（その中に種）」をつくり出して、自分たちの「子孫を残そう」とするためだからである。

それでは、「昆虫やその他の生き物」などをできるだけ多く惹きつけるためには、一体、どうしたらよいかと言えば、それは、できるだけ「昆虫やその他の生き物」などを惹きつけるような、より魅惑的な「色や形あるいは香りや蜜」の「花」にすることであり、それゆえ、花を咲かせる植物たちは、その全栄養分を費やしてでも、できるだけ魅惑的な「色や形あるいは香りや蜜」の「花」を咲かせて、自らの「種（子孫）」をより多く残そう（或いは残したい）という思いが、本能的に働いているということである。つまり、植物たちが、なぜ「花」を咲かせるのかと言えば、それは、まさに「昆虫やその他の生き物」などを自分のところにできるだけ多く惹きつけたいがためであり、そのためには全栄養分を注ぎ込んでででも、できるだけ魅惑的な「色や形あるいは香りや蜜」の「花」にする必要が、どうしてもあるということである。

それゆえ、花を咲かせる植物たちは、一般に「昆虫やその他の生き物」などを惹きつけるためにこそ、できるだけ魅惑的な「色や形あるいは香りや蜜」の「花」を咲かせようとして咲かせているわけであるから、われわれ人間がそのような「花」を見て、少なからず「心動かされる」としても何も不思議なことではない。なぜなら、植物たちが花を咲かせるのは、まさにそのような「目的」（つまり昆虫やその他の生き物）などをできるだけ多く惹きつけたいがためであるとともに、最終的には自分たちの「種」（子孫）をできるだけ多く残したいという最も「根源的な欲求」からなのである。

それは、われわれ人間の「女性たち」があらゆる努力を費やしてでも、より魅惑的な「色や形あるいは香りや蜜」の「花」になろうとして、まさに「上は頭の髪の毛から、下は足の爪の先まで」、その身を実にいろいろな化粧や衣服などで色彩鮮やかに飾り立てるのも、根源的には「男たち」をその「色香」で惑わし惹きつけては、いわゆる「性交」（セックス）をし、その結果として、自分たちの「子孫」を残そうとする行為となんら変わるものではない。それゆえ、われわれ人間は、なぜ「草木の花」に「心惹かれる」のかと言えば、それは、「花」そのものがそもそも「生き物」を誘惑している存在であると同時に、できるだけ「生き物」を誘惑して、その結果として、自分たちの「種」（子孫）をできるだけ多く残そうとしている存在でもあるからである。

そして、できるだけ多くの「生き物」を誘惑するためには、どうしてもより魅惑的な「色や形あるいは香りや蜜」の「花」になろうと本能的に働いているために、実に色彩鮮やかでより魅惑的な「色や形あるいは香りや蜜」の「花」が数多く存在することにもなるのだろう。しかも、それは、「花」だけではなく、そこに「実」を結ぶことによって、動物たちをも誘惑していることになるわけである。すなわち、植物たちは、より魅惑的な「色や形あるいは香りや蜜」の「花」を咲かせることで、より多くの「昆虫たち」を誘惑しているとともに、より魅惑的な「色や形あるいは香りや味」の「実」を結ぶことによって、より多くの動物たちをも誘惑していることになるわけである。

つまり、花を咲かせる植物たちにとって、花を咲かせること自体が本来の目的などでは決してなく、花を咲かせるのは、あくまでも「昆虫やその他の生き物」などをできるだけ多く惹きつけるための手段に過ぎず、真の目的は何かと問えば、それは、集まった「昆虫やその他の生き物」などを媒体として、おしべの花粉を運ばせ、そして、できるだけ多くのめしべに受粉させるためであり、また、様々な植物たちが「実を結ぶ」のも、決して「実を結ぶ」こと自体が本来の目的などではなく、真の目的は、その「実」を求めて集まってくる動物たちを媒介にして、その「実の中にある種」をできるだけ広い範囲にばらまかせるための手段に過ぎないのである。

なぜなら、植物もまた間違いなく「生き物」（生命体）である限りは、自分たちの「種」（子孫）をできるだけ多く残したいという最も「根源的な欲求」があるからである。そのためにも、植物は、できるだけ魅惑的な「色や形あるいは香りや蜜」の「花」を咲かせては、より多くの「昆虫たち」を誘惑しているとともに、より魅惑的な「色や形あるいは香りや味」の「実」を結ぶことによって、より多くの動物たちをも誘惑していることになるわけである。その結果として、自分たちの「種」（子孫）をそれだけ多く残せる確率がより高くなると本能的に働いているということである。なぜなら、植物もまた「生き物」（生命体）である限りは、与えられた環境のなかですべて従順に従って生きているだけの存在

ではなく、むしろ、その与えられた環境のなかでできるだけその環境に適応しようとする働きとともに、その与えられた劣悪な環境をも何とか乗り越えようとして、何か新しい「変化」（進化）がその「生き物」（生命体）のなかに生じてきたとしても、何も不思議なことではなく、それこそ、まさにこの地球上に実に多種多彩な「動植物」などが存在する極めてはっきりとした理由にもなるわけである。

そして、もしそれぞれの植物たちが本能的に競い合って、より魅惑的な「色や形あるいは香りや蜜」の「花」を咲かせては、より多くの「昆虫やその他の生き物」などを誘惑しようとしているならば、敢えてその誘惑に身も心もすべて任せて、その植物のなかに深く溶け入っては、終には「一体」となり、自らその「植物」となって、その「内的世界」を徹底的に生きてみることによってこそ、なぜ、この「植物」は、このような「色や形あるいは香りや蜜」の「花」を咲かせているのか、まさにその「神秘」にふれることができ得るとともに、今まで経験したこともないような植物の「心」というようなものを、まさに実感として深く理解することもでき得るようになるということである。そして、それこそは、まさに最も深い「人間と植物との交流」ということにもなるのだろう。

## 六、人間と古生物との交流

では、次に「人間と古生物」との交流について、少し考えてみたいと思うが、その「古生物」とは、もちろん、「……この地球上にかつて生息していた生物であり、今はもう死滅している生物」のことであるとともに、それは、「……それぞれの地質のなかに化石や痕跡などとして残っているもの」である。

それは、今から約四十億年前、この地球上のいわゆる「原始の海」から、それは、まさに神秘的とも言うべき「最初の生命」が誕生することになるが、その「最初の生命」というのは、いわゆる「原核細胞」（つまり「単細胞生物」）であったということである。そして、その「原核細胞」というのは、細胞内に「核を持たない細胞」ということであり、その「原核細胞」（つまり「単細胞生物」）は、地球上にはまだ「遊離した酸素」というものが存在しなかったので、当然のことながら、いわゆる「好気呼吸」ではなく、いわゆる「嫌気呼吸」を行ない、硫化水素やメタン、その他などを養分としていたということである。それが、すなわち、嫌気呼吸をする「原核細胞」ということになるわけである。

やがて、そのような嫌気呼吸する「原核生物」が海中に数多く繁殖するようになるとともに、海中には「二酸化炭素」なども大量に蓄積されるようになるわけである。そして、今から約三十二億年前頃には、その「二酸化炭素と水と光のエネルギー」から、やがて「明反応」で「酸素」を放出し、そして、「暗反応」で「炭水化物」（でんぷんやブドウ糖など）をつくり出す、いわゆる「光合成」を行なう「独立栄養生物」、それは、「葉緑素」（クロロフィム）を持ち、光合成を行なう「原核生物」（つまり「シアノバクテリア」＝「ラン藻類」）が誕生することになるということである。

そうなると、太古の海中には「遊離した酸素」が増えるとともに、今度は、その「遊離した酸素」を取り入れて呼吸をする、いわゆる好気呼吸する「原核細胞」も誕生して来たということである。そうすると、いわゆる「太古の海」には、三種類の「原核細胞」が存在するようになったということである。その結果、どうなったかと言えば、それは、一方

の嫌気呼吸する「原核細胞」が、もう一方の好気呼吸する「原核細胞」を捕り込んでは、何と細胞内「共生」をして、いわゆる「真核細胞」（それは「核膜に包まれた核を持った細胞」）へと「大変身」（つまり「進化」）を遂げることになったということである。それが、今から約二十億年ぐらい前のことになるかと思う。さらに、一部の「真核細胞」は、光合成を行なう「原核細胞」をも捕り込んでは、同じように細胞内「共生」を行なうことによって、いわゆる「植物」が誕生することにもなったということである。

そのように、いわゆる「真核細胞」の誕生こそは、その後の「生命体」（つまり「生物」）がこれほどまでに多種多彩に「変化」（進化）してきた「最大の要因」となるものである。というのも、単細胞の「原核細胞」では、一つの細胞が二つに分裂して無数に増殖するという、いわゆる「全く同じ遺伝子を持った子孫の増殖」であり、それゆえ、何らの「変化」も「進化」も極めて起こり難（にく）いということである。一方、「真核細胞」というのは、例えば、一つの「細胞」の中には、植物では、細胞膜、ミトコンドリア、核、葉緑体、その他などがあり、また、動物では、細胞膜、ミトコンドリア、核、ゴルジ体、中心体、その他などがあるが、その場合、ミトコンドリアでは、「ＡＴＰ合成」を行ない、そして、葉緑体では、「光合成」を行なうというように、それぞれの「細胞内小器官」がそれぞれ効率よく作用するようになったとともに、やがて「有性生殖」によって、いわゆる「遺伝子組み替え」なども自然と行なわれるようになったり、或いは、時には「突然変異」なども頻繁に生じるようになったということで、この地球上にはこれほどの実に多種多彩な「動植物」たちが繁栄し存在するようになったということである。

＊　　＊

さて、今日の「生物の分類」の仕方は、今までのような「動物と植物」との二つに分類するという仕方ではなく、いわゆる「六界説」と呼ばれるものである。それは、まず最初は、いわゆる「原核細胞」（つまり「原核生物」）と「真核細胞」（つまり「真核生物」）との、この二つに大きく分類されます。そして、最初の「原核生物」というのは、たった一つの「原核細胞」からなる「単細胞生物」のことであり、それは、「古細菌」と「真正細菌」とに分かれます。そして、「古細菌」としては、例えば、海底火山の熱水付近に生息する超高熱菌や温泉などに生息する高熱好酸菌、あるいは死海などに生息する高度好塩菌、さらに、牛の胃などに住むメタン菌、その他などである。――一方、「真性細菌」としては、例えば、「らん藻」（シアノバクテリア）をはじめ、その他の無数の「細菌」（バクテリア）……例えば、納豆やチーズなどの「発酵細菌」、また、大腸菌、その他の「腸内細菌」、また、枯葉や屍体などの解体者としての細菌（バクテリア）類、そして、様々な「病原細菌」、その他などである。そして、それら以外のものは、すべて「真核細胞」（つまり「真核生物」）になるということである。

そして、その「真核生物」というのは、基本的には「四つ」に分けられています。その一つは、「原生生物界」であり、一つは、「菌界」、一つは、「植物界」、そして、もう一つは、いわゆる「動物界」という分類の仕方になっている。――すなわち、「原核生物」である、「古細菌」と「真性細菌」、それに「真核生物」である、「原生生物界」、「菌界」、「植物界」、そして、「動物界」で、いわゆる「六界説」になるということである。

＊　　＊

さて、われわれの「地球」が誕生するのは、約四十六億年前であり、最初は、まさに「マ

グマオーシャン」（つまり「超高温のどろどろに溶けたマグマ状態」）であったが、そこに十回目に巨大な隕石が衝突して、結果、月が誕生し、やがて「微惑星」などの衝突も減って来ると、「地球の表面」も冷えて来て、最初の薄い「地殻」ができるとともに、大気中の水蒸気は凝結して雲となり、大量の雨が降って「海洋」となる。その「海」から「最初の生命」が誕生するまでを、いわゆる「冥王代」（地球誕生～約四十億年前まで）をそう呼んでいる。次に、最初の生命である「原核細胞」から、やがて「真核単細胞生物」が現われるまでの「原核生物」（バクテリア）の時代を、いわゆる「始生代」（約四十億年前～約二十五億年前まで）をそう呼び、そして、やがて「真核単細胞生物」から「多細胞生物」（約十億年前に出現）が爆発的に増える前の五億四千万年前までを、いわゆる「原生代」（約二十五億年前～五億四千万年前まで）をそう呼び、「原生代」は、さらに細かく「細分化」されるが、それは、研究が進んで様々なことが分かって来たからである。そして、「冥王代」と「始生代」それに「原生代」のこの「三つ」を合わせて、いわゆる「先カンブリア時代」と呼ばれているものである。――つまり、「三つ」を合わせた「先カンブリア時代」というのは、前述のように、まず、「地球誕生、巨大な隕石衝突、月の誕生、冷えて、地殻や海洋の誕生、やがて、原始の海から最初の原核細胞の誕生、次に、光合成を行なうシアノバクテリアの誕生、また、海中の酸素を吸って呼吸をする好気呼吸の原核細胞の誕生、そして、嫌気呼吸の原核細胞が好気呼吸の原核細胞を捕り込み、真核細胞となり、やがては多細胞生物が爆発的に増える前まで」のことである。この時期は、まだそれほど多くの生物が誕生したわけではなく、また、殻や脊椎などを持った生物もいなかったために、地層にはこれという「化石」も残っていないということで、どのような「生物」が生息していたかもよく分かっていない時期でもあり、それに比べて、次の「カンブリア紀」以降は、逆に、爆発的に多種多様な生物が誕生する時期にあたるわけである。

では、次の「古生代」（カンブリア紀・オルドビス紀・シルル紀・デボン紀・石炭紀・ペルム紀）であるが、まず、「カンブリア紀」では、有名な「三葉虫」をはじめ、アノマロカリス、オピビニア、ピカイア、ハルキゲニア、フルディア、その他、実に奇怪な姿の生物が大量に発生した、まさに「カンブリア大爆破」と呼ばれるものである。そして、その「古生代」の動物の化石としては、代表的な「三葉虫」（通常複眼が左右に一対ある生物）の繁栄をはじめ、筆石類やオウム貝類、また、腕足類やクラゲ或いはサンゴ、また、最初の「脊椎動物」（最古の「魚類」）としては、カンブリア紀の後期、顎のない「無顎類」の「ハイコウイクチス」や「ミロクンミンギア」などが浅い海に登場し、その後、デボン紀までには、顎のある「有顎類」（それは①絶滅種の「板皮類」や「棘魚類」の出現と②現存種の「軟骨魚類」や「硬骨魚類」）などが誕生、それは、今日に続く、サメやエイなどの「軟骨魚類」やその他の数多くの「硬骨魚類」、また、有名なシーラカンス（デボン紀）、肺魚（デボン紀）、その他などの出現であり、まさに「魚類時代」と呼ばれるものである。そして、次の「石炭紀」や「ペルム紀」には、肺魚から進化した「イクチオステガ」や、その他の「両生類」が活躍する、いわゆる「両生類時代」を迎える。それに加えて、「石炭紀」には初めて「爬虫類」が誕生し、また、様々な「昆虫類」（例えば、巨大な「トンボやムカデ或いはウミサソリやゴキブリ」その他）などが繁栄する。一方、植物では、「シルル紀」に「プシロフィトン」という下等な「シダ植物」が初めて陸に上がるが、「デボン紀」には「リンボクやフウインボク」などの大木が繁茂して、「森林」

が出現するとともに、次の「石炭紀」には、まさに「大森林時代」を形成することにもなるわけだ。そして、その「大森林」の木々が極めて大規模な「光合成」を行なったために、地球の大気には「酸素」が飛躍的に多くなったとともに、その巨木の「リンボクやフウインボクあるいはロボク」などは、長い歳月のなかで地中で、いわゆる「石炭」へと変化することにもなったということである。

次は、「中生代」（三畳紀・ジュラ紀・白亜紀）であるが、この「中生代」こそは、まさに巨大な爬虫類の「全盛時代」にあたるが、それは、造山運動などで火山爆発などが活発化し、大気の二酸化炭素の濃度も高くなって、まさに「温暖化」したためである。例えば、陸上ではまさに巨大な「恐竜」たちがかっ歩していた時代であり、例えば、首が長く草食性の「ブロントサウルス」や背中に剣状の突起物を持つ「ステゴサウルス」、また、頭に角のある「トリゲラトプス」や肉食で狂暴な「ティラノサウルス」、また、海には魚竜の「イクチオサウルス」や首長竜（くびなが）の「プレシオサウルス」、それに「アンモナイト類」が大繁栄し、さらに、大空（おおぞら）には、有名な翼竜の「プラテノドン」や「ランフォリンクス」などが飛びかい、また、ジュラ紀には、極めて原始的な鳥とされる「始祖鳥」などが現われることにもなるわけだ。一方、植物では、「裸子植物」（それは「針葉樹類・イチョウ類・ソテツ類」）などが大繁茂するとともに、「デボン紀」の後期には、いわゆる「被子（ひし）植物」（つまり「花を咲かせる植物」）なども出現するようになるが、突然、約六千六百万年前に、巨大な「隕石」が地球に衝突するという「天変地異」によって、巨大な「恐竜時代」は、その「終焉」を迎えることになるのである。

ちなみに、有名な「パンゲア大陸」という「超大陸」（すべての大陸がくっついた状態）は、古生代の「ペルム紀」（約二億五千万年前頃）に誕生し、それは、中生代の「三畳紀」（約二億年前頃）まで続くが、その「三畳紀」（約二億年前頃）から、再び、分裂し始め、そして、「ジュラ紀」（約一億八千万年前）には、いわゆる「北半球」と「南半球」の二大陸に分離し、そして、「白亜紀」（約六千五百万年前頃）には、今日のような「四大陸と南極とオーストラリア大陸」に近い地形になり、さらに、約四千万年前～約二千万年前には、インド大陸がアジア大陸に衝突して、まさに「ヒマラヤ山脈」ができ上がるという推移になるのである。それは、ドイツのウェゲナーの「大陸移動説」から始まり、今日の「プレート・テクトニクス」理論によって実証されているものである。

最後に、「新生代」（第三紀と第四紀）であるが、この「新生代」になると、まさに「哺乳類時代」を迎えるとともに、植物では、いわゆる「被子（ひし）植物」の全盛期に入るということである。そして、「第三紀の終わり」頃には、いよいよわれわれ「人類の誕生」（約七百万年前頃）となるが、それは、次のような推移になるかと思う。

遙か遠い大昔（むかし）、われわれ人類の祖先とされる猿たちは、豊かな森林の木の上で生活をしていたという。やがてアフリカ大陸の真下では大きな「地殻変動」が起こり、その南北に走る「大地溝帯（だいちこうたい）」の形成のために、その「大地溝帯（だいちこうたい）」が豊かな「森林の大地」を東西に分ける結果となったとともに、その東側では雨があまり降らないような環境となり、そのために、豊かな「森林」から「草原」へと変化することとなり、その結果、われわれ人類の祖先とされる猿たちは、やがて「森林」の樹の上から下りて、いわゆる「草原」で生活をするようになるとともに、その頃から、次第に「直立二足歩行」を始めるようになったというのが、「従来の定説」（つまり「イーストサイドストーリー」）であったわけである。

ところが、二〇〇一年に、最古のヒトの化石と呼ばれる「トゥーマイ」がアフリカ中部のチャド共和国ジュラブ砂漠で発見されると、その「考え方」は、大きな打撃を受け、今日では、アフリカ中部のまだ森林豊かな時から、われわれ人類の祖先たちは、なぜか地上を「直立二足歩行」するようになったという「考え方」に大きく変わって来ているのである。そして、その「直立二足歩行」こそは、他の動物たちとは決定的な「進化の違い」をもたらした、（それは、両手が自由になり、道具などを使うようになるとともに、大脳を大きくすることを可能にしたからであるが）、われわれ人類への大きな「一歩」になったということである。その後、有名な「猿人類」の「アウストラロピテクス」（約四百万年前～約二百万年前まで）がアフリカに登場する。その「アウストラロピテクス」から枝分かれした「猿人」が進化して、やがて「原人類」（約百八十万年前頃に出現）となり、それがアフリカからアジアへと進出して、例えば、「北京原人」や「ジャワ原人」となり、石器とともに、火を使うようになるのである。その後、「旧人類」（約五十～三十万年前ごろ）の出現となるが、その一種である有名な「ネアンデルタール人」（約二十万年前～約三万年前まで）は、主にヨーロッパをはじめ、西アジアから中央アジアまで分布していたという。一方、「新人類」（ホモ・サピエンス）は、約二十万年前にアフリカに誕生し、やがて、約六万年前にアフリカを出て、世界中に広がって行くことになるが、その「新人類」と「ネアンデルタール人」との混血もあったと言われるが、その「新人類」は、今から約三万年前までには、主にヨーロッパをはじめ、西アジアから中央アジアまで分布していた「旧人類」に取って代わるようになったという。その「新人類」こそは、今日の「われわれ人類」（ホモ・サピエンス）の直接の先祖であり、その「新人類」（ホモ・サピエンス）は、長い文字のない「先史時代」を経て、やがて、文字のある「歴史時代」（つまり「古代・中世・近世・近代・現代」）へと続くのである。――ちなみに、数多くの「人類」が誕生しながらも、生き残ったのは、ただ一種類の「われわれ人類」（つまり「ホモ・サピエンス・サピエンス」）だけであったということである。

＊　　＊

さて、そのような「古生物」とわれわれ人間との交流であるが、それは、ほとんどの場合、「化石」との交流であり、それゆえ、多くの場合、化石の「発掘や研究」などに深くたずさわっているような人たちにどうしても限られてしまうものである。しかし、一方、小さな子供から大人の人たちまで、例えば、中生代の巨大な「恐竜」などには非常に強い「興味や関心」を持っていて、それゆえ、「恐竜展」などが開催されれば、それこそ実に数多くの人たちが、その巨大な「恐竜の化石」を見ようと集まって来るものであり、そのような時には、間違いなく、巨大な「恐竜の化石」と想い想いに交流していることになるかと思う。もちろん、そういうことだけに限らず、「本や雑誌」などをはじめ、その他の実に様々な「メディア」やインターネットなどを通じて、実に多種多様な「古生物」を見聞きしたり、読んだりしているわけだから、それゆえ、「古生物」との交流は、何も専門家だけの特権ではなく、一般の人たちでも非常に幅広く行なわれているものである。

そのように、「地質時代」の各地層から出てくる動植物の「化石」などを研究することは、そのままこの「地球上」の動植物の「進化の方向」（過程）を知ることにもなるわけである。――ところで、一般に小さな子供から大人の人たちまで、なぜ「中生代の恐竜」に強い「興味や関心」を示すのだろうか？　むろん、それにもいろいろな理由があるかと

思うが、まず最初に考えられることは、やはり「巨大である」ということであり、われわれ人間よりも「遙かに巨大な生き物」が、かつてこの地球上に生息していたということが、なぜか不思議な想いにさせられるとともに、その「恐竜」がただ単に巨大であるだけではなく、実に多種多様な「恐竜」がいて、しかも「圧倒的な力強さ（パワー）」でこの地上をかっ歩していたということが、われわれ人間の「想像力」をかき立てるとともに、今から約六千六百万年前に、なぜか突然としてそれらの「巨大な恐竜たち」のほとんどが絶滅してしまったということも、われわれ人間の「知的好奇心」や様々な「想像力」などをなおさらかき立てるものとして、より魅力的に働いたということになるのだろう。

また、われわれ人間は、なぜ、エジプトの「ピラミット」のようなものに心惹かれるのだろうか？　もちろん、それにもいろいろな理由があるかと思うが、一つには、やはり「知的好奇心」をそそられる様々な「謎」を秘めているからであろうし、また、もう一つの大きな理由としては、何と言っても、やはり「巨大である」ということがあるかと思う。そして、古代人は、数多くの「巨石建築物」、その他を遺しているが、その理由の一つとしては、もちろん、権力の誇示などがあるかと思うが、それに加えて、われわれ人間というのは、一体、なぜに「巨大なもの」に心惹かれるのだろうか？　それには、次のようなはっきりとした、より根源的な「理由」があるからである。

つまり、われわれ人間自体は、そもそも「知る能力にも行なう能力にも」自ずと限界があるとともに、実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされ、しかも、ちょっとしたことでもすぐに傷つきやすい、そういう不安定で極めて弱々しい「生き物」であり、やがては「病気や事故あるいは年老い」て、この世を去っていかなければならないという「宿命」を宿している存在でもあるわけだ。――だからこそ、もっと強固で、しかも、何があろうと決して揺らぐことのない、半永久的に変化しないような、そういう「絶対的なもの」に強く心惹かれるような傾向が、少なからずあるということである。

例えば、古代人にとって、極めて「巨大な石」であれば、その極めて「巨大な石」をわれわれ人間が足で思いっきり蹴とばそうが、両手で思いっきり押して動かそうとしても、全くびくともしないとともに、たとえ激しい暴風雨などに襲われようとも、何らの変化も受けず、半永久的にその場所に存在し続けるような、そういうまさに「絶対的なもの」（例えば「巨石建築物」など）に心惹かれるような傾向があったということである。

というのも、われわれ人間というのは、知る能力にも行なう能力にも自ずと限界があるために、逆に、われわれ人間の「心」というのは、知る能力も行なう能力も完全であるような「絶対的な存在」としての全知全能的な「神」というものを「想定」（或いは「イメージ」）するようになるのである。また、現実の女性のなかにきれいな人たちは数多くいるだろうが、しかし、一から十まですべて完璧な女性というようなものはどこにも存在しないがために、逆に、われわれ人間の「心」というのは、文字通り、パーフェクトな存在としての「美の女神」（「ビーナス」）というものを「想定」（或いはイメージ）することにもなるのだろう。つまり、われわれ人間の「心」というのは、決して「中途半端なもの」などを愛し求めているわけではなく、最究極的には、やはり、文字通りの「完全なるもの」（つまり最究極の〈一なるもの〉）を愛し求めているということである。

ちなみに、この地球上に現われたあらゆる「生き物」のなかで、まさに最強の「生き物」は、一体、何かと敢えて問えば、それこそ、中生代に現われた、あの巨大な「恐竜」たち

であり、しかも、実に多種多様な「恐竜」たちの中でも、例えば、草食のステゴサウルスやスーパーサウルス、また、肉食のアロサウルスやティラノサウルス、また、カルカロドントサウルスやギガノトサウルス、さらに、スピノサウルス、そして、海洋生物の「プレデターX」、その他、それらのどれかがまさに「最強の生き物」ということになって行くのだろう。もちろん、これからもっともっと強力な「生き物」が発掘されるかも知れないが、――そういう、われわれ人間など全く寄せつけないような驚くばかりの「巨大な身体」とともに、圧倒的な「力強さ（パワー）」を持ったもの、つまり、巨大で「圧倒的な存在」には、なぜか心惹かれるようなところがあるということである。それは、なぜかと問えば、それは、われわれ人間というものが本来、まさに「弱々しい存在」であるがゆえに、逆に、もっと強固で、もっと揺るぎのない「絶対的な存在」（或いは「圧倒的な存在」）というものに強く心惹かれるような傾向が間違いなくあるということである。

＊　　＊

（「交流欲Ⅲ」へと続く。）